

## アイリッシュ・アメリカンのステレオタイプ ——シャムロック編

夏目博明

本稿の目的は、アメリカで流通していた歌に登場する要素を検討することによって、アメリカにおけるアイリッシュ性のステレオタイプを明らかにすることである。アメリカで流通していたとは、アメリカで新規に書かれ流通していた場合と、そもそもアイルランドやイギリスで書かれたものがアメリカで流通していた場合の双方を言う。具体的には、アメリカで印刷出版されたものを、アメリカで流通していたと理解することになる。対象とする時代は、アイルランドからアメリカに移民する者の数が多かった19世紀中葉から20世紀初頭までである。本稿があつかう対象は、アメリカにおいてもアイルランドにおいても日本においても、従来、研究が手薄だったものであるため、まず一次資料の具体的な検討から始める必要がある。その結果、本稿は詞華集の観を呈することにもなる。

### 擲掄の歌

まず、「パディ・マーフィーのオークション (Paddy Murphy's Auction)」<sup>1)</sup>というタイトルのアイリッシュ・アメリカンを擲掄している歌をみることから始めよう。19世紀後半のニューヨークで活躍した、ボードビルの大立者トニー・パスター (Tony Pastor) が歌ったものである。以下に掲げる部分は、オークションに出品されている品を説明しているくだりである。

1番の品は、巨大豚の頭／2番の品は、壁のところ、壁龕に展示中／パデ

イ・ハガーティの皮製ズボンのたれふたとアイボリーボタンです… / 3番、彗星の尾、皆さんがじっと見たもの / 4番、ミッキー・シェイクスピアが芝居を書くのに使ったチョーク / 5番は法律家の良心、さあ、どんどん値をつけてください / 6番、ホレス・グリーリーが使っていた古い白色帽子 / 世界が始まる前に印刷された本がたくさん / 誰も使ったことがない言語で書かれています / 7番は、まとめてお安く売ります、説教師にもってこいの品 / ヘンリー・ビーチャーが使った政治的説教です

(The article marked: No. 1: is the head of the mammoth hog, sirs, / And No. 2 is on the wall, stuck in one of the niches .... / It's the flap and ivory-button of Paddy Haggerty's leather breeches. / No. 3: it is the Comet's tail, that all the folks did gaze at: / No. 4: is the piece of chalk that Micky Shakespeare wrote his plays wid; / No. 5's a lawyer's conscience: come bid on that now, freely; / And No. 6: an old white hat: belonged to Horace Greely! / We've a lot of books that printed were before the world began, sirs, / And written in a language that was never spoke by man, sirs; / No. 7's a lot I'll sell you cheap: it's suited for a preacher: / They're Political Sermons that were used by Henry Beecher.)

以下、さらに続くが、ここで止めておく。この歌のアイリッシュの特徴を説明しよう。まず、タイトルにあるパディとは、アイルランド人男性の典型的な呼び方であり、愚弄した色合いで使われる。マーフィーもアイリッシュの典型的な姓のひとつである。1番目に巨大豚とある。アイルランドでは豚が飼われていて、しかも、昔の話ではあるが、同じ屋根の下で豚と一緒に暮らすことが珍しくなかった。2番目のズボン（ブリーチ）もまた、アイリッシュが穿くことが自然だとされているものである。4番目のミッキーについては、ミッキーがアイリッシュを指す言葉であることを忘れてはならない。マイケル (Michael) が通称マイク (Mike) になり、さらに子どもを呼ぶ場合の崩し方をすると、ミッキー (Micky) になる。6番目の、世界が始まる前に印刷された本、

誰も使ったことがない言語は、いわゆるアイリッシュ・ブル (Irish bull) と呼ばれるものに属している。

アイリッシュ・ブルは、侮蔑的な言廻しである。その言廻しについて *O.E.D.* の説明をみよう。ブル (bull) n4 の2の項目は次のように定義している。「自己矛盾した命題。近代の用法では、言葉の上で明らかな矛盾を含んでいる表現、あるいは、言っている本人は気づかない滑稽な不整合を含んでいる表現。いまでは、アイリッシュという形容辞とともに使われることが多い。しかし、この語は、アイルランド人と結びつけられるよりもずいぶん前から使われてきた。」つまり、本人がそれと気づかないまま発している矛盾を含む発言を意味する。さらに、*O.E.D.* のアイリッシュ (Irish) の形容詞 A4 の項目は次のようになっている。「性質や本性においてアイリッシュ的であるさま。アイリッシュ的特徴とされるものを持っている状態。とくに、一見矛盾した発言について使われる。」この定義も、アイリッシュについて、矛盾した発言をする特徴をもっているとしている。「パディ・マーフィーのオークション」に登場する「世界が始まる前に印刷された本」や「誰も使ったことがない言語」は、アイリッシュ・ブルそのものである。

このように、「パディ・マーフィーのオークション」はアイリッシュ性をふんだんに備えている歌である。アイリッシュをネタに笑いを誘っている。だが、その笑いの質はどのようなものだろうか。誰がどのように笑うのだろうか。それは、このアイリッシュ・アメリカンのステレオタイプ研究全体が解答を出す課題になる。

次に、ふたつの歌を比較する。「立派なイギリスの老紳士 (Fine Old English Gentleman)」<sup>2)</sup> と「立派なアイルランドの老紳士 (Fine Old Irish Gentleman)」<sup>3)</sup> である。ふたつともアメリカで印刷され、流通したものである。まず、前者のふたつの連をみる。

すてきな昔の歌をきかせてあげよう、すてきな昔の才人がつくった歌さ／  
立派なイギリスの老紳士の歌で、紳士は昔からの地所をもっていた／昔か

たぎの大盤振る舞いで古い屋敷を維持していた／人のいい年寄りの門番が  
いて、門前の年寄りの貧者を助けていた／立派なイギリスの老紳士らし  
く、昔いつもね／家のホールは、歴史を感じさせ、槍や鉄砲や弓が壁に  
さがっていた／剣や立派な昔の盾もあった、昔の敵にたいしてかざしたも  
のだ／そのホールに「崇拜する御方」が堂々と座られた、ダブレットとト  
ランクホーズを身にまとい／おいしい年代物のサック酒を飲み干して、立  
派な昔からの鼻を暖めた／立派なイギリスの老紳士らしく、昔いつもね  
(I'll sing you a good old song, made by a good old pate, / Of a fine old  
English gentleman, who had an old estate; / And who kept up his old  
mansion at a bountiful old rate, / With a good old porter to relieve the old  
poor at the gate, / Like a fine old English gentleman, all of the olden  
time. // His hall, so old, was hung around with pikes, and guns and bows, /  
And swords, and good old bucklers, which had stood against old foes, /  
And 'twas here "his worship" sat in state, in doublet and trunk hose, / And  
quaffed his cup of good old sack to warm his good old nose, / Like a fine  
old English gentleman, all of the olden time.)

次は、「立派なアイルランドの老紳士」のふたつの連である。

上品な歌を聞かせてあげよう、あるパディーの頭から生まれた歌さ／本当  
に年寄りのアイルランド紳士の歌で、紳士は立派な地所をもっていた／そ  
の屋敷は泥でできていて、草葺屋根他すべてを完備していた／てっぺん  
には穴が空いていて、そこから煙が優美に出ていった／フレー、アイルラ  
ンドの老紳士、昔の奴よ／／屋敷の壁はひどく寒々しく見るものはなかった  
／ただ、古いこん棒はあった、それでたくさんの敵を倒してきた／老パー  
ニーはくつろいで座っていた、靴もズボンも穿かないで／密造ウィスキー  
を飲み干して、大きい赤鼻を暖めた／立派なアイルランドの老紳士らし  
く、昔の奴よ

(I'll sing you a dacent song that was made by a Paddy's pate, / Of a real  
ould Irish gentleman, who had a fine estate, / Whose mansion it was made  
of mud, with thatch and all complete, / With a hole at the top, through  
which the smoke so gracefully did retrate: / Hurrah for the ould Irish  
gintleman, the boy of the oulden time, // His walls so cold, were cover'd  
with a devil a thing for show, / Except an old shillalah, which had knocked  
down many a foe, / And there ould Barney sat at ease, without shoes or  
hose, / And quaff his noggin of potteen to warm his big red nose, / Like  
a fine ould Irish gintleman, the boy of the oulden time.)

後者は前者のパロディになっている。前者のイギリスの老紳士は、立派な屋敷に住んでいて、調度品も立派、人々にたいして寛大であり、偉い人の訪問も受け、高価なお酒を飲む。それにたいして、後者のアイルランドの老紳士と呼ばれている人物は、屋根は草葺で土壁の、天井には穴が開いている貧乏な家に住んでいる。壁に飾ってあるのはこん棒で、ズボンをはかないまま密造ウィスキーを飲んでいる。

両者をいまずこし詳しくみよう。イギリスの老紳士の歌は、徹底的に old を強調して、古き良き時代の色合いで首尾一貫させている。この old は、好ましい属性を帯びたものとして、麗しい郷愁の対象を彩っている。それにたいして、「アイルランドの老紳士」に登場する ould には否定的な匂いがつきまわっている。ここでは「イギリスの老紳士」との対応を考慮して「アイルランドの老紳士」と訳してはみたものの、「アイルランドのおいぼれ紳士」とでも訳すほうが正鵠を射ている。まず、「イギリスの老紳士」の old が、「アイルランドの老紳士」では ould になっていることから問題にする。後者の綴りは、アイリッシュ的ななまった発音を表記しているものである。また、同様の事情で、前者の gentleman が後者では gintleman になるなど、複数の訛が登場している。表記、訛のレヴェルから、アイリッシュへの揶揄が始まっている。土壁、草葺の屋根とは、アイルランドに典型的にみられる質素な家の定番であり、

「イギリスの老紳士」のお屋敷と好対照をなしている。しかも、壊れて開いた天井の穴から煙が「優美に」立ち昇っている。剣などが「イギリスの老紳士」の壁を飾るのにたいして、「アイルランドの老紳士」の壁にかかっているのはこん棒 (shillalah) である。このこん棒は、闘争を好む野蛮なアイリッシュというステレオタイプを象徴する品である。アイリッシュを侮蔑的に描く戯画では、クレイパイプと並んで頻繁に登場するアイリッシュの徴となる品である。「イギリスの老紳士」が飲むのは、サックという上品な酒である。それにたいして、「アイルランドの老紳士」が飲むのは、アイリッシュならではの密造ウイスキー (potteen) である。これが「上品な」歌の内実である。

アイリッシュ・アメリカンないしアイリッシュを揶揄する歌のイメージが湧いてきただろうか。本稿であつかう歌には、アイリッシュ・アメリカンがホスト国アメリカのなかで苦しみ戦ってきた様子が反映されている。移民した第一世代やそれ以降の子孫たちが、アメリカで人生を切り開いていったときに遭遇した経験、抱いた感情、押し付けられたステレオタイプ、あえて引き受けたステレオタイプを以下検討していく。

### シャムロック——夢の国

「昔もっていたもの、いまもっているもの、欲しいもの、それらが全部アイルランドにある (All That I Had And All That I Have And All That I Want Is In Ireland)」<sup>9)</sup> というタイトルの歌がある。その歌詞の1番は次のようである。

ぼくはこっちにいて、皆はそっちにいる／皆とぼくのあいだには広い海がある／でも、そう、ギリギリ頑張れば、泳いで渡ることができる／海をこえて家に帰るんだ／シャムロック、シャノン川、キラーニーの湖／起伏がある緑の丘と谷間／ぼくはそれらを捨てなければならなかった、たしかに、取っておくことはできなかった／アイルランドの女の子と一緒にまと

めて手放した／母親の声が、帰っておいでとぼくに言っている／父親のタバコの煙を想いため息がでる／たしかに、昔もっていたもの、いまもっているもの／欲しいもの、それらが全部アイルランドにある

(I'm over here and they're over there, / There's a wide strip of water between them and me / But bedad, I can swim it if put to the limit / I'm goin' to go back to my home o'er the sea. / The Shamrocks, the Shannon, the Lakes of Killarney, / The green rolling hills and the valleys between / I had to forsake them, shure I couldn't take them / I left them along with my Irish colleen. / The voice of my mother is calling me homeward / And I sigh for a puff of my daddies dudeen / Shure'en all that I had and all that I have / And all that I want is in Ireland.)

欲しいものの全部がアイルランドにある、という自慢話である。まず、「昔もっていたもの、いまもっているもの、欲しいもの、それらが全部アイルランドにある」というタイトルそのものが、アイルランドにたいする手放しの賞賛、執着を語っている。過去から現在にいたるすべての人生のステージで、自分にとって必要なものすべてがアイルランドのなかにあるとしている。ただ、1行目の歌詞から分かるように、「ぼく」は「こっち」つまりアメリカにいて、「そっち」つまりアイルランドにいない。どれほどアイルランドを賞賛しようとも、アイルランドに戻ることは実際にはない、という図式がアイリッシュ・アメリカンたちに通底しているものであり、この歌の場合も例外ではない。それ自体の詳細はいま論じないとして、この歌で列挙されている欲しいものをみよう。「シャムロック」、「シャノン川」、「キラーニーの湖」、「起伏がある緑の丘と谷間」、「女の子」、「母親」、「父親のタバコ」である。アイリッシュ・アメリカンが郷愁の対象とするものが続々と登場している。本稿（シャムロック編）では、このなかのシャムロックについて検討する。

シャムロックとはアイルランドに自生する三つ葉の草である。アイルランドの代表的な聖人であるセイント・パトリックがアイルランドにキリスト教を布

教するさい、三位一体の教義の説明をするのに活用したとされる草である。歴史的な事実が何であるかは明らかでないにせよ、そういった伝説が人々のあいだに流通していることが重要である。「いとしい可憐なシャムロック (Dear Little Shamrock)」<sup>5)</sup> という歌では、シャムロックがセイント・パトリックと結びつけられて登場する。その最初の4行をみてみよう。

いとしい、可憐な草が我らの島に生えている／そう、それを植えたのはセイント・パトリック／お日様は喜んでセイント・パトリックの労苦に微笑みかけた／セイント・パトリックの目の露でシャムロックをちよくちよく潤した

(There's a dear little plant that grows in our isle; / 'Was St. Patrick himself sure, that set it, / And the sun on his labor, with pleasure did smile, / And with dews from his eyes oft did wet it,)

アイルランドの礎というべきセイント・パトリックによって植えられた、つまり、お墨付きをもらったシャムロックは、アイルランド人の心に生い茂っていくことになる。別の歌では、セイント・パトリックがシャムロックを帽子につけていたとある。

帽子のところに、善きセイント・パトリックはいつも付けていたものだ／シャムロックを、市 [いち] に行く時いつも

(In his hat, good St. Patrick used always to wear, /The Shamrock, whenever he went to a fair;)

シャムロックは、セイント・パトリックだけでなく、天使や楽園とも結びつけられる。「アイルランド人の心の庭にはいつもシャムロックがある (You'll Find a Shamrock Down in the Garden of Ev'ry Irish Heart)」<sup>6)</sup> は次の一節を含んでいる。



天使がシャムロックを祝福した、シャムロックがわたしたちのものになったときから／歴史のなかで、シャムロックはいつも大事な役割を果たしてきた／いま、あなたは遠く離れているけれど／いとしい昔からのエリン島から、いま／すべてのアイルランド人の心の庭にはシャムロックがある／妖精の心には

(The angels blessed it, since we possessed it, / And in our hist'ry it, always played a part, / Now even tho' you're very far away, / From dear old Erins Isle today, / You'll find a Shamrock down in the garden of ev'ry Irish heart. / The fairies heart.)

ここで、アイルランド人の心は妖精の心であり、そこにシャムロックが茂っている。

ついで、「スワニー川の川辺にシャムロックが茂るなら (If Shamrock Grew along the Swanee Shore)」<sup>7)</sup>の冒頭の一節である。

シャノン川が流れるところに花が咲いている／それは可憐な緑のシャムロックだ／それは楽園のもので、アイルランド人の目には／一番すてきな花さ

(There's a flower that grows where the Shannon flows / it's just a little Shamrock green / it came from Paradise and to Irish eyes / it's the sweetest flow'r they've ever seen)

このようにセント・パトリック、天使、楽園と重ねられたシャムロックは、ハープとならんで、というよりもそれ以上に、アイリッシュ・アメリカンにとってアイルランドのエンブレムと化していった。緑の国アイルランドという言い方がある。その場合、広く緑豊かな国という意味合いもあるものの、まさにシャムロックの国という意味で理解されるべきである。シャムロックが、アイリッシュ・アメリカンの歌のなかで登場する具体例をみていこう。

「三つ葉のシャムロックがぼくに帰っておいでと呼んでいる (It's the Three Leaves of Shamrock That's Calling Me Home)』<sup>8)</sup> の1番全体をみよう。

悲しい気持ちにさせる手紙を読んでいたところさ／いとしいエメラルド島  
からきた手紙／髪が灰色になった老いた母親からで、ぼくが帰るのを待つ  
ている／そう、いとしいアイルランドの微笑みに思いこがれてる／母親が  
はるばる送ってきたのは三つ葉のシャムロック／ぼくと母親を隔てる海を  
こえて／シャムロックが送られてきたところへ、今日、どれほど戻りたか  
ったか／(コーラス) 三つ葉のシャムロックがぼくに帰っておいでと呼ん  
でいる／海を越えたところにある小さな緑の島へ／ぼくはどこをさすらう  
ときでも、シャムロックをもっていこう／だって、この三つ葉のシャムロ  
ックがぼくに帰っておいでと呼んでいる

(I've been reading a letter that makes me feel sad / And it came from the  
dear Emerald Isle / From my gray haired old mother whose waiting for  
me / Sure I long for dear Irish smile, / It was three leaves of shamrock she  
sent all the way / 'Cross the ocean that keeps us apart, / How I wish I was  
back where they came from today / And I'm telling you right from my  
heart. / (chorus) It's the three leaves of shamrock that's calling me home /  
To that little green Island way over the foam, / And I carry them with me  
wherever I roam / For those three leaves of shamrock, are calling me home.)

アイルランドにいる母親から手紙が来る。そこにシャムロックが同封されてい  
る。母親が自分の帰国を待ちわび、シャムロックの三つ葉が帰っておいでと呼  
んでいる、といった内容である。ここでは、シャムロックとアイルランドにい  
る母親が重ねられている。さきに紹介した歌にあった、欲しいものの一覧のな  
かに母親が入っていることを想起されたい。また、little green Islandの部分  
は、little green shamrock が強くエコーしているのではないだろうか。そうな  
らば、シャムロック＝島＝アイルランドという図式がきれいに成立している。

シャムロックはアイルランドそのものである。さらに、ここで使われている「さまよう (roam)」という語は、アイリッシュ・アメリカンをテーマにした歌でよくみられるものである。「さまよう」は、まず、故国アイルランドを離れること自体を意味し、さらに、アメリカ内で仕事を求めて転々とすることも意味する。アイリッシュ・アメリカンは、基本的には都市部に群れなして住んでいたが、よりよい仕事を求めて、あるいは、ともかくなにか仕事を求めて転々とすることも典型的な人生のひとつの形だった。分かりやすい例をあげるなら、大陸横断鉄道を物理的な意味で実際に作った労働力の代表はアイリッシュ・アメリカンの男性であり、その仕事は、ある場所が完成したら、次の別の場所へと移動していくことになる。エリー運河敷設の場合も同様である。そのさい、結婚している男性の場合、妻子をニューヨークやボストンに残していた。

いまひとつ同一テーマの歌をみよう。「シャムロック一輪——キルデアから (Just One Sprig of Shamrock: from the County Kildare)」<sup>9)</sup>である。

昔からのアイルランドを去って遠くへ向かったとき／すてきな女の子に言ったのさ、いつか戻ってくると／運命と戯れて、さまよい続けた／年月を重ねるうちに、もっと家から遠くなった／彼女が気にかけてるって、今日始めて知った／キルデアからプレゼントをほくに送ってくれたのさ／(コーラス) 海を超えて、シャムロック一輪／いとしい母親に頼んだのだ、それをほくに送ってくれと／しぼんで色あせていた／緑色は消えかかっていた／でも、それはほくの生誕地に近い土地からのものだ／涙でかすんだほくの目には、この世で一番きれいなものに見えた／シャムロック一輪、キルデアから

(When leaving old Ireland to go far away, / I told a sweet colleen I'd come back, some day; / I flirted with fortune, continued to roam, / As years rolled along I was still far from home. / 'Twas only today that I knew she did care, / She sent me a gift from the County Kildare, / (chorus) Just one sprig

of shamrock from over the sea, / She asked my dear mother to send it to  
me. / It was wilted and faded, / It's green nearly gone, / But it came from  
the sod near the place I was born, / And to my tear dim'd eyes seemed the  
fairest of fair, / Just one sprig of shamrock from the County Kildare.)

ここでは、シャムロックの送り方にひねりが入っている。さきにみた歌では、母親が息子のためにシャムロックを送っている。アイリッシュ・アメリカンの歌では、母親と息子との結びつきが強く、息子がアイルランドを思うとき、なによりも母親を思うのが典型である。この歌の場合、女の子がシャムロックを送ってくるさい、その男性の母親経由で送っている。恥かしがって遠慮がちな純愛のかたちであるという見方も成りたつものの、なによりも母親が一番の位置をしめる人間関係のあり方が正面に出ているとみるほうが適切である。ただ、アイリッシュ・アメリカンの歌の場合、アイルランドにいる女の子との関係の基本形が、一般的に、あくまで純愛であるのは確かである。

母親、女の子、歌い手の男性が登場する歌をもうひとつみる。「アイルランド、我がアイルランドよ（あなたを想っている）(Ireland My Ireland [I'm Longing for You])」<sup>10)</sup>の1番である。

毎晩、夢に現れる／海を越えた遙かな昔の家が／壊れかかった小屋がある  
昔風の場所／でも、そこにいとしい人たちがいる／シャムロックが茂り、  
バラがつぼみをつけるとき／そう、アイルランドのことを考えるのさ、だ  
って、そこが心が向かうところ／優しく心から待っている母親と女の子へ  
と／おお、アイルランド、我がアイルランドよ、あなたを想っている／い  
としい昔からのアイルランドを離れて久しい／でも、大好きな風景を思い  
だす／いつか、あの遙かな地へ行こう／そこに、召されるまでいよう  
(Ev'ry night in my dreams there's a picture, / Of my old home far over the  
sea, / Just an old fashioned spot with its tumble down cot, / Still it holds  
the ones dearest to me. / When the bloom's on the shamrock, the bud's on

the rose, / Shure, I'm thinking of Ireland, for that's where my heart goes. /  
 To the Mother and Colleen who wait fond and true, / O Ireland, my  
 Ireland, I'm longin' for you. / It's been years since I left dear old Ireland, /  
 Still to me come the scenes that I love, / And I'm going some day to that  
 land far away, / There I'll stay till I'm called up above.)

ここで注目したいのは、母親と女の子が登場すること、そして、母親の次に女の子という順序で出てくることである。母親こそ第一順序に位置している。ふたりとも、誠実に、だが、消極的に待っている。アイルランドは、アイリッシュ・アメリカンが安息の地として思い描くことができる故郷である。この歌い手の男性は、夢のなかでふたりを見る。アイリッシュ・アメリカンの歌では、歌い手の男性はアメリカに住んでいて、海を隔てたところにある遠い世界を想像のなかで追うだけである。帰りたいという気持ちが表明されても、けっして、いま帰国を実行することはない。この歌でも、いつか、であるにすぎない。

ついで、「アイルランドは天国に違いない、だって母親がそこから来たんだ (Ireland Must Be Heaven, For My Mother Came from There)」<sup>11)</sup>の一節をみる。

アイルランドは天国に違いない、だって天使がそこから来た／その半分も  
 すてきできれいな人を見たことがない／彼女の目は星の光のよう／白い雲  
 がその髪に合っている／そう、アイルランドは天国に違いない、だって母  
 親がそこから来たんだ

(Ireland must be Heaven, for an angel came from there, / I never knew a  
 living soul one half as sweet or fair, / For her eyes are like the starlight, /  
 And the white clouds match her hair, / Sure Ireland must be Heaven, for my  
 mother came from there.)

ここで母親は天使と同列におかれ、母親の地であるがゆえにアイルランドは天

国となる。さらに、母親が、恋人のような筆致で描かれていることにも注目されたい。

次は「シャムロックの小さな束 (A Little Bunch of Shamrocks)」<sup>12)</sup>の1番である。

ぼくの手のなかにシャムロックの小さな束がある／あの緑の小さな島から  
海をこえてきたものさ／すてきなアヴォカの谷で摘んだもの／ぼくの恋人  
が、ここ、ぼくのところまで送ってくれたんだ／シャムロックが、太陽が  
頭上高く輝くアイルランドへぼくを連れ戻してくれる／シャムロックが、  
愛している人たちと過ごしたぼくの国へと連れ戻してくれる／ぼくのキラ  
ーニーが見える、荘厳な美しい昔から知っている湖が見える／ブラーニ  
ーの魔法の石も、そこでぼくは恋人の手を取ったんだ／夢のなかに、もう  
ひとりいる／ぼくのいとしい老いた母親だ、「いとしの、いとしのエリン  
へ戻っておいで」／ぼくの手のなかのこのシャムロックの小さな束のなか  
に見えるんだ

(In my hand I hold a little bunch of shamrocks, / From that little Isle of  
green across the sea, / They were gathered in the Vale of sweet Avoca, /  
And my sweetheart sent them over here to me, / They bring me back to  
Ireland the sun shines bright above, / They bring me back to my land I'm  
with the ones I love. / I can see my own Killarney / And the dear old lakes  
so grand, / And the Magic stone of Blarney, where I held my sweetheart's  
hand, / In my dreams there's just one other, / I can see my dear old  
Mother, / "Come back to Erin Mavourneen, Mavourneen," / In this little  
bunch of Shamrocks I am holding in my hand.)

ここでは、シャムロックを送ってくるのは、母親ではなく恋人である。1行目の a little bunch of shamrock と2行目の that little Isle of green は互いにエコーしあい、シャムロックとアイルランドが重なっている。シャムロックから見え